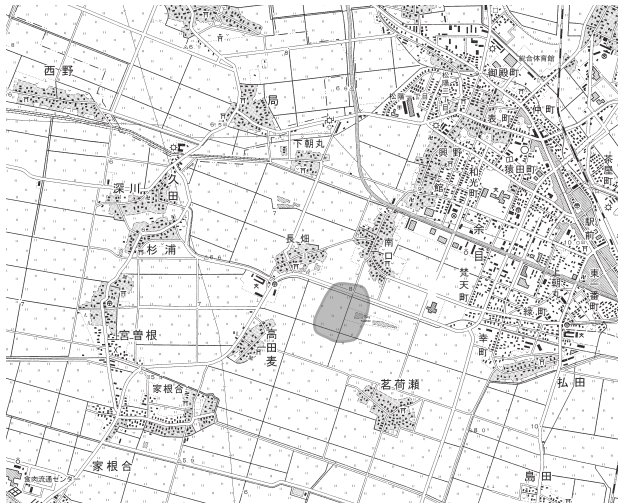


みなみぐち

## 南口A遺跡

遺跡番号 昭和61年度登録  
所在地 東田川郡庄内町余目字南口  
北緯・東経 38度50分26秒・139度53分23秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局酒田河川国道事務所  
調査原因 余目酒田道路改良事業  
調査面積 6,500㎡  
現地調査 平成21年5月13日～9月16日  
調査担当者 氏家信行（調査主任）・渡部裕司  
調査協力 庄内教育事務所・庄内町教育委員会  
遺跡種別 集落跡  
時代 奈良時代・平安時代・近世・近代  
遺構 竪穴住居跡・土坑・溝跡・水路跡・柱穴等  
遺物 土師器・須恵器・陶磁器・木製品・古銭

（文化財認定箱数：16箱）



### 調査の概要

南口A遺跡は、庄内町の余目駅から南西約2kmの水田地帯に立地し、標高7mを測る。遺跡の北側を県道43号余目加茂線が走る。

遺跡は、昭和61年に県営圃場整備事業の県道43号余目加茂線の事業計画に際して、山形県教育委員会によって試掘調査が行われ、近世の遺跡として登録された。翌、62年の工事の際には県教育委員会によって立会調査が実施されている。

その後、余目酒田道路の建設計画により、平成17年に踏査による現地確認を行い、平成20年に重機を使用

したトレンチによる試掘調査が行われ、溝状の遺構や水路跡が見つかり、奈良・平安時代の土器と近世の陶器が出土した。この試掘調査の結果から遺跡範囲内の工事区間においては発掘調査が必要と判断された。

調査は地域高規格道路新庄酒田線の一部を構成する「余目酒田道路」の改良事業に伴う緊急発掘調査として行った。

発掘調査は、重機を使用しての表土除去の後、人力による遺構検出と遺構精査を行い、これらと併行して、写真撮影と図面作成などの諸記録作業を行うという工程で進めた。

### 遺構と遺物

今回の調査では、南側を中心に奈良・平安時代と近世・近代の遺構や遺物が検出された。

古代では、竪穴建物跡、土坑、溝跡などの遺構が検出され、遺物は須恵器や土師器が出土している。

竪穴建物跡は上部が削平され、掘り方のみの検出で、遺物の出土も無いが、形態や規模、埋土の様子から古代のものと考えられる。土坑、溝跡、柱穴などは埋土や底面から須恵器、土師器、黒色土器が出土したが、大半が破片資料であった。器種には坏、蓋、有台碗、有台坏、壺、甕などがあるが、坏類が多く見られ、墨書土器も1点含

まれる。出土した土器の特徴から古代の集落の時期は9世紀中頃から後半を中心に営まれていたと推測される。

近世・近代では、土坑、溝跡、水路跡などがあり、陶磁器や瓦、木製品などが出土している。

土坑には、底面に木の板や細木を敷いたものがあり、建物の柱の沈み込みを防ぐために据えたとも考えられる。また、溝跡には橋が架けてあったと思われる、その部材と推測される木製品や杭が出土した。江戸時代中期頃の橋の構造の一端を知り得る資料である。

水路跡は2本見つかり、水の流れをよりスムーズにするために、直線状に造りかえたことが推定される。

遺物は、木製品の他に16～19世紀代の陶器や磁器があり、在地の大宝寺焼のほか愛知の瀬戸焼、佐賀県の肥前焼、長崎県の波佐見焼などもみられ、当時の庄内

地方における陶磁器の流通・消費が窺える。また、鶴ヶ岡城で使用された赤瓦と同一の瓦も出土している。これは、鶴ヶ城が破却された後に城の瓦を再利用するため、この地域に運ばれたと考えられる。

### まとめ

遺跡は、約1,200年前の奈良・平安時代と近世・近代の複合遺跡で、周辺には奈良・平安時代の遺跡と考えられている払田遺跡や南口B遺跡、そして、昭和49年の調査で9～11世紀代の須恵器や土師器が出土した梵天塚遺跡があることから、本遺跡との関連が窺われる。また、溝跡や水路跡が多く見つかったことから水を巧みに利用していたことが窺える。但し、明確な古代の竪穴住居跡や建物跡が確認されなかったことから集落の中心は、今回の調査区の東側にあると考えられる。



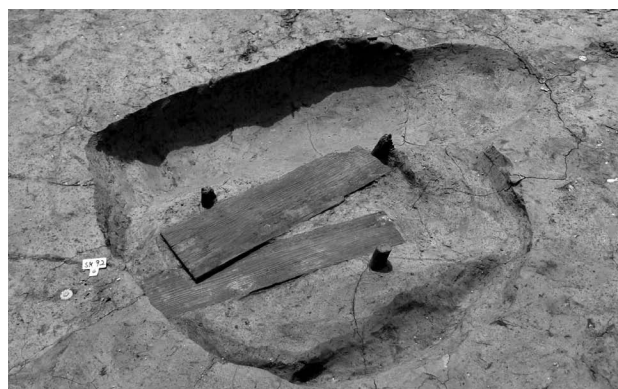
調査区全景（北から）



磁器の碗・皿



竪穴建物跡（東から）



土坑（北東から）



須恵器の坏・蓋